



宝剣の女騎士

ゼリア

木森山水道
表紙イラスト：トイト

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『宝剣の女騎士ゼメリア 前編』
『宝剣の女騎士ゼメリア 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



宝剣の女騎士
ゼメリア

木森山水道
表紙／トイト

登場人物紹介

Characters

ゼメリア=アイビス

宝剣を持つ女騎士。定期的に行われる魔物駆除の任務を受け、魔の森を訪れた。

ゲランシュ

森に棲むエキドナ。ゼメリアを玩具にしようと責め立てる。

ペラツハ

知能が高いアラウルネ。ゲランシュとともにゼメリアを責める。

この魔の森には、定期的に人員が派遣されている。

「我が王国民に手を出すな。醜い魔物どもが……！」
魔物を駆除するためだ。

焼き払うには惜しい量の資源が内在し、採掘・採取の障害になる魔物を根絶させるには
広すぎるこの森。

遙か昔の王が選んだ管理方法は、魔物封じの結界で囲い、繁殖した魔物を定期的に刈る
ことだった。

「ゼメリアアイビス……様……？」

背中に庇われている若い娘が、女騎士の名を呆け声で呟く。

低く力強く清涼感のある凜声の持ち主は、鋭角的な真紅の騎士鎧で身を包んでいる。兜、
胸当、背当、肩当、籠手、腰当、脛当、鉄靴。対戦闘と言うよりは対戦争と言える防具の
充実ぶり。装備しているだけで疲労しそうなものなのに、目を皿にして女騎士の隅々を見
ても、疲れの色を見つけることはできない。

二人は無数の魔物たちに取り囲まれていた。

——フシューッ、ブルルル、ブオオオオ、グルルル。

ゴブリン、オーク、オーガ、ケンタウロス、ミノタウロス、エトセトラエトセトラ。
中心の二人から魔物たちへの距離は十歩に満たない。

ギョウギョウ詰め、グロウグロのモンスターたちの不快な体臭も、鼻息も、呼気も、熱気も、容赦なく女二人に押し掛かってくる。

魔物たちは皆鼻息が荒い。興奮して血行が促進しているのだろう。ただでさえ人間よりも逞しい筋肉の身体は一回り大きくなっており、醸す威圧感、若い娘をガタガタ震えさせている。

だが、魔物たちの血走った目は、若い娘ではなく女騎士に注がれていた。

この森に入ってきた若い娘をよってたかって追いつめた刹那に割って入ったのが相当気に入らなかつたらしい。次の瞬間に一斉に飛びかかってきてもおかしくない位に殺氣だっていた。

「あ……ああ……あんなので攻撃されたら……」

ミノタウロスが踏み出したのを見て、娘が掠れ声で叫んだ。

視線を注ぐ牛魔人の身長は二メートルを超えている。人間よりも牛寄りの頭と足を持ち、他の魔物に勝るとも劣らぬ筋肉質な胴体と腕を持つ。片手には、自分の身体よりも大きい棍棒を携えていた。

牛魔人が動き出す。ズシン、ズシンと地面を震えさせながら、人間の女にして十歩の間合いを三歩で詰める。

枯れ枝を振りかぶるように棍棒を上げた瞬間、空気が引つ張られてつむじ風が起った。

「あ……ああ……わたし死ぬんだ……死にたくない……死にたくないよ……!!」

若い娘はゼメリアにしがみついて震えながら、涙をボロボロ流している。

「いたずらに我が国民を怖がらせるな!」

吼えたゼメリアが、手にしていた剣を片手で投擲する。

全長が百五十センチほどの大剣だった。片手持ちのバースタードソードよりも長く、両手持ちのツーハンドソードよりも短い。刃の身幅は両者の倍以上ある。重量にしたら十キロは下らない代物で、とても、細腕の騎士が片手で投げつけられるものではない。しかし、刀身は唸りを上げながら矢の速度で獲物に飛んでいく。

ブシュツツツ!

鋭利な先端は岩盤みたいな胸板を貫き、背中から顔を出した。牛魔人は口から泡を噴いて後ろに倒れ込む。大木の倒壊を思わせる地響き上がり、森全体が揺れた。

ゼメリアは娘をそつとふりほどくと、牛魔人へゆつくりと歩み寄る。魔物に囲まれているというのに、まるで散歩をしているかの足取りだった。

「あ、危ない!」

娘の声が響く中、一瞬で間合いを詰めたケンタウロスが携えていた槍を突き出した。狙いはゼメリアの上腕。突進力と背筋、腕の膂力をたっぷりきかせた一撃は、いくら鎧を着ていても、女などは易々と貫ける。矢のように早い攻撃ならば尚更だ。

「フッ！」

短く鋭い吐息を吐いたゼメリアは、背中を仰げ反らした。鎖骨と絶壁を作る胸元の先端を、槍の穂先が空しく過ぎる。

「ハアッ！！」

ゼメリアはそのまま身体を回転させ、肉塊から引き抜いた剣に独楽の軌跡を描かせた。ズバアツツツツ！

胴体の中程まで切り抜けると剣を抜く。ケンタウロスは血飛沫を上げながら重い音を立てて倒れ込み、それきり動かなくなる。

「行くぞ魔物ども、私が相手をしてやる！」

真紅の騎士は十歩の距離を瞬時に詰めて魔物の群れに飛びかかった。

踊るように、少しも立ち止まることなく、動作を鈍らせることなく滑らかな移動を繰り返す。

振り下ろされた棍棒を避けてゴブリンを刺殺し、オークのタックルを交わしては横から豚腹を深く薙ぐ。

誰にも爪の先さえ触れさせない。屈強な魔物たちは、たった一人の女騎士の前に次々に屍になっていった。

最後に残ったオーガの鉄棍棒を斬り飛ばして背中を切り払うと、ゼメリアは深い吐息を

吐いた。

「ああ……すごい……これが『カーサファイロ』と魂を通わせた騎士様の力……」

村娘が呆然と呟く。恋する乙女に似た憧憬溢れる熱い視線で、真紅の鎧の女騎士を見つめている。

「私とこの剣について随分詳しいのだな」

「はい！ 魔物退治の騎士様選ばれたゼメリア様のことはお触れで知っておりましたし、わたし、武器とかが好きで王都に行った時は図書館でそういうのをよく読んでいます！」

村娘はゼメリアが持つ剣に顔を近づける。何匹もの魔物を斬ったというのに血臭が全然ない。広い表面は鏡のようにツルツルで、紅潮顔がくつきりと映し出されていた。

「『カーサファイロ』は王国十二宝剣の一振りで、森の魔物駆除に使われている由緒正しいスゴい剣なんですよね！ お役目をいただいた騎士様が、どこかにあるという聖域で剣と十日間、水だけで過ごして魂をシンクロさせると、こおんな重そうな剣も小枝みたいに軽くなるのか。ああ、でも、これを振るうゼメリア様もとても素敵で、剣と騎士様はお似合いのカップルに見えました！」

「それはありがたい。ところで、娘はどうしてここにいるのだ？ 王命により、森に入るには許可が必要だが、私を知る限り許可を得た者は最近いなかったはずだが」

顔を輝かせていた娘が、即座に俯いた。何かをぶつぶつと呟いた後、勢いよく顔を上げる。「やっぱり、命の恩人の騎士様には嘘はつけませんよね。わたし、これを採りに勝手に森へ入っていました」

そう言うと、苦痛に耐えるようにギュッと目を閉じながら、胸元から潰れた花を取り出した。

「これは薬草だな。しかも、王の許可なく採取するのは認められていないものだ」

「すみません！ わたしの母の病気を治すためにどうしても必要で……でも、お店は在庫切れで買えなくて……」

王命に背けば裁判にかけられるのが当然であり、無許可で採取したとなると数年の懲役は免れない。場合によっては、身体に烙印も刻まれる。娘の態度を見るに、それは分かっているのだろう。

騎士には訴追権が与えられていることも。現在の王は秩序維持に熱心で、騎士が不当に訴追しなかった場合にも重い罰を定めている。

「お前はいいリボンをしているな」

娘の髪を結わえているポロポロの日焼けリボンに、ゼメリアは籠手の手でそつと触れた。

「え？」

ゼメリアが兜を脱ぐ。すると、兜の中に押し込められていた空色の長い髪が、さらりと

腰まで落ちた。一本一本が独立している艶やかな髪は、汗を纏って一層輝いている。

切れ長の目尻は上がり気味で、瞳は宝石みたいに済んだ青色だった。彫像のように高い鼻の細面には、色も肉付きも薄い唇が慎ましげになっている。

現実の人間と言うよりは画家が描いた絵画に近い。まだ二十歳という若い端正な美貌が優しげに微笑む。

「髪が邪魔で困っていたところだ。『私が摘んだ』その花と、リボンを交換してくれないだろうか」

ゼメリアは採取の許可を得ていない。そして、騎士と市井が同じ罪を犯した場合、騎士の尊厳を維持するために騎士のみが罰せられる仕組みになっている。

「あ……え……」

それも、娘は分かっていたらしい。女騎士に引つ立てられるとばかり思っていたのだろう、自分に都合のよい展開に目を白黒させている。

ゼメリアはそんな彼女からリボンを奪い、告げる。解けた娘の髪は枝毛が多いが、健康的に艶めいている。

「道は分かるな？ 私が来た方向へ行けば、魔物に追い回されることはないはずだ。早く帰って、その花でできる薬を母親に飲ませるといい」

そつと肩に手を置くと、娘は弾かれたように頭を下げた。

感電流は乳房の芯を貫いて、身体の芯まで響いてくる。

乳首を擦られるだけで背中が仰け反り、鉄靴の中で足指が丸まる。呼吸が荒くなり、肩当をつけた肩がゆるやかに上下動して止まらない。

「ちゅぽん……ウフフ、もうすっかりビンビンですね……わたしたちの乳首責め、そんなに気持ちよかったですか？ オンナですもの、無理もないですよねえ」

口を離れたゲランシユが楽しそうに微笑する。鶺鴒色の先端は魔物の唾液でべちよべちよだった。乳頭の先っぽから伸びる唾液の糸は、大きなU字を描きながらゲランシユの口に繋がっている。

ペラッハが翳った方の乳首は対照的に乾いており、カチカチに勃起しながらいやらしく振幅している。

「黙れっ、このようなことをされても私は屈しない……この借りは必ず返してやる！」

ゼメリアは怒鳴ったが、牝魔物たちは怯むどころかクスクスと笑い出した。

「あら、これで終わりだと思いで？ まだ、始まったばかりだというのに」

「なんだと……？」

牝奴隷調教はまだ始まったばかりだと言ったゲランシユが大きく口を開ける。

内部は人間の口内と同じだった。真っ白な歯が綺麗に並び、バラ色の粘膜で囲まれて、唾液系の柱ができている。変わったところと言えば、前歯の中に犬歯みたいに尖った歯が

混ぜていることくらいだろう。

「あ~~~~むっ♪」

「ぐうッ！」

ブヂユブリツツツツッ！

それを乳輪と乳肌の境目に突き立てられた。乳悦で膨張していた乳肌が破られ、内部の脂肪と牙の先が触れる。

「はああああ……こ、これは……！」

牙を突き立てられたのは、針に刺された程度の痛みだったが、それだけでは済まなかった。ギユウギユウ詰めめの乳脂肪の塊に、何かが無理矢理割り込んでくる重苦しい感覚。まるで、内部に粘っこい液体を注入されているような不気味な充填感は今まで感じたことがなく、それだけに平静ではいられない。

「ふはあ……フフフ、騎士様のオッパイに魔法をかけさせてもらいました」

犬歯を抜かれた乳肌には二つの小さな穴ができていたが、血は一滴も出ていない。

「これは……！」

だが、噛まれたすぐ上、丸く張りつめる上乳に、エキドナの容姿を象った黒いマークが浮き上がる。

「オッパイの気持ちよさが頂点に達すると、妊婦か否かにかかわらず母乳が出ちゃう魔法

です。エキドナのマークはその証。自然に治ることはなく、魔法でなければ解除できない一種の呪いです♪」

「母乳が出る魔法だと……？ 馬鹿な。そんな魔法など聞いたことはないぞ」

「人間にできないからと言って、エキドナにもできないとは思わないでください」

ゲランシユは、そそり立つ乳首にかぶりつく。今度は歯を立てていず、勃起しきつたイチゴ乳首を肉厚の唇で挟んでいる。

敏感な部分が甘い圧迫感に包まれる。プリプリした弾力で包まれるのは、異様な心地よさでうなじがサアツと粟立った。魔物のぬるま湯のような体温が、乳頭から乳房の内部に伝わるのも奇妙な安楽を覚えさせる。

「ブチュ~~~~ツ、ちゅぱちゅぱ、ンフーツ、チュプツ、チュプ~~~~ツ、ブチュ~~~~ツ、んふううう」

唇から口内へ突き出る乳頭の頭は、舌でべろべろ舐められた。正面から上下に撫で上げられ、繰り返して左右になぎ倒される。

性感帯への愛撫は五感を低下させ、快感だけを意識させる。乳首だけを責められているというのに、自分の胴体が唇にはまれ、頭を舐め回されている心地にさせる。

「くっ……あっ……ふうう……はああ……ち、乳首が……あ……っあ……」

この森に足を踏み入れる前は無垢な乳首だったというのに、もうすっかり穢されてしま

った。魔物の舌の感触を知らぬ部分はなくなくなって、唾液で汚れていないところもない。しかも、相手が人外であっても快感を得てしまう事実を思い知らされている。

「んふう……はあ……ほら見てください。これは何でしょうねえ」

女を墮落させるのが大好きな変態らしく、女騎士の乳首を責めているだけでも陶醉を覚えていたらしい。こぼす息は湿り気豊富で、瞳は微かに潤んでいる。

魔物から解放された乳頭は、湯気が見えそうなほど温まり唾液の膜が張られていた。そして、ツンと上向く乳首の先から乳白色のトロツとした液体が染み出している。

「これは……母乳か……まさか………本当だったのか！」

「ようやく信じてくださいましたねえ」

「今からおつとデカチチを淫らに調教してあげる。男が射精するみたいに、母乳を『射乳』させてあげるネ」

肉体を改造された事実には愕然とするゼメリアをよそに、ゲランシユはもう片方の乳房にも魔法をかけた。

エキドナのマークが浮き上がると、ペラツハの蔓の先が両乳首へ接近する。乳頭の直前で止まるとチューリップみたいの花を咲かせ、胸の先端に食いついてきた。

ブチュウ……ッ、ジュルッ、ジュルッ、ジュッブ……ッ！

花びらの内側は胸の先端に吸着。乳首と乳輪を猛烈に吸引する。敏感な部分を吸われる

のは異様に心地よかった。乳房が甘く蕩け、処女の股間までもが妖しい官能に包まれる。花の内部から分泌されるネバつく汁が、バキュームされる快感を大きくしていた。

「はぁあつ……胸が熱くつ……んんっ……！」

乳房がぼうつと熱くなつていく。胸板の奥も熱くなり、ドロドロした塊が乳首の方へ流動しているイメージが湧いてくる。切迫感を覚えるのだが、痛苦と言うよりも甘美に近い。何度も味わっていると感じつきになりそうに危険を感じさせる危うい快感。

「騎士様あ、おっぱいスゴく赤くなっていますよお。静脈まで浮き出っていて。前よりも一回り膨れていて……気持ちいいんですね？」

見間違えようのない興奮反応を示す横乳を、ことの元凶が指の腹で軽く撫でる。

「ひうあ……ッ！」

すると、背筋がゾクリと震えた。一瞬、宙空でつま先立ちになり、つま先から頭のとつぺんまでがピーンと突つ張る。万歳を強いられている腕も例外ではなく、危うく逆転の鍵を落とすところだった。

「ひと撫でただけでそんな反応とは……強すぎました？ とつても敏感なのですねえ……では、ふうふうして差し上げましょう」

そう言つて、ゲランシユが唇を突き出す。ぽつてりした牡丹色の唇をふいごにし、感じ易くなつている乳房に息を吹きかける。上乳の真ん中に吹きかけられた息吹は下降気流と

なつて乳肌の全面を這い進む。

「うあああつ……！」

それだけで、また背筋を反らしてしまった。しかも今度は、あられもない叫び声を搾り出された。魔物と戦う際に上げる雄叫びとは正反対の、みつともない抑揚に満ちた脆さ溢れる叫び声。

(……こんなことが……私がこんな感覚を感じさせられるなど信じられない……！)

これが恐らく、女の悦びというものなのだろう。子を育むために発達した乳房を持つ女だけが味わえる快感。騎士生活一筋の自分が享受していることも驚きだが、与えているのは牝の魔物。自分を牝奴隷に調教し、大切な宝剣を始末すると言った敵なのだ。

なのに、乳房と乳首に与えられる快感で、意識が白みかけている。今にも失神してしまふような位だ。本当にそうなってしまった時、きつとそれが絶頂の瞬間で、母乳が噴出する時なのだろう。

「クツ！　そ、そんなことをしても無駄つ——ひいあ！　や、やめろ……これ以上しても私は……あああつ！」

弱気を隠し、恫喝するように言い放つが途中で嬌声に変わってしまう。そんな女騎士を、牝魔物たちは優越感たっぷりに眉目を歪ませ、見つめている。

「ピチャツ、ふうふうつ、ふつふう、ペろペろ、騎士様あ、我慢できなくなったらい

つでも母乳を出していいですからね？ 初めての射乳が最高になるよう、お手伝いさせてもらいますから」

「だから私は……ッ……母乳など出さないと……んアアッ！」

長く伸ばした舌で血管の浮いた乳房を舐め回しながら、口を寄せている乳首に熱く湿った吐息を吹きかける。

下半身が蛇の魔物は、優しくあやすように、女騎士に射乳させようとしてくる。上目遣いで見てくる目には、無垢な女騎士に墮落の魔悦を教える歡喜が宿っていた。

乳首に食いつく花も依然としてバキュームを行っている。敏感な突起を吸い上げられる快感と、舐め吹かれる悦樂が三位一体で女騎士を追いつめる。

一方的な防戦を強いられている騎士の乳房は、燃えるように熱くなっている。乳房の内側で膨らんで、一際熱い乳首の寸前で停滞している膨満感はもう限界だった。

根本で蔓に括られることで前方に突き出し、内乳同士を左右に引き裂かれ、ピンク色に染まって最高潮に張りつめるふたつの肉メロンは、乳悦で背筋が仰け反る度に、ブルンブルンと量感たっぷりに振幅している。ひっきりなしに乳肌全体が小さく振幅している様子が、今にも母乳が噴出しそうな緊迫感を醸している。

「ああ……出るな………母乳など………はあ………ハアッ！」

実の所は出したくて堪らなかつた。

胸の内部が甘くて重い悦楽で占領されているのは、母乳が嘔き出そうとしているからだと予想はついている。

魔法で脳に教えられたのか、それを解放したのなら、さらに素晴らしい快感を貪れるという、ほとんど確信に近い意識がある。

それを味わってみたいという感情が心を席卷していた。

（だがこれは危険だ……コイツらは私を墮落させ、宝剣を始末すると言ったのだぞ！）
親切心から女の悦びを教えてくれているわけではないのだ。これはきつと、破滅への一里塚に違いない。焼き切れそうな意識の中、辛うじてそれは分かるのだが。

「ソッフ、我慢は身体に毒ですわ。さあ、思い切りイッて母乳を出してくださいまし」
「そうそう。女ミヨリってやつを味わいなヨ」

気さくな笑みを浮かべながら、牝魔物たちは女騎士を責め立てる。

「あああ……はあつ……ハアツ……も、もう駄目だ……抑えられない……ッ……ああ……
アアア、出るウウウツツツ！」

花の吸引力が最高潮に達し、ゲランシユが桜色に染まりきった乳肌を軽く唇で吸い上げた瞬間、

ビュルルルルルルルルルツツツツツ！ ビュ~~~~~ツツツツツ！

「んあああああああああ！」

ペラッハが歓声を上げた。剥き出しの亀頭はバラ色をしている。大きさは松ぼっくりほどもあるが、カリの広がりぶりはキノコと張り合えるレベルだった。

「ああ……オマ○コが疼きますわあ……はああ、素敵……種付けされたい……」

「ウフフ、女のくせにこおんな立派なペニスを生やしてるなんて、いやらしいッ」
瞳を潤ませた二体が、クリペニスに顔を寄せてくる。

賞賛はあながち誇張でもなさそうだった。女騎士を取り巻く牡魔物たちの中には、女騎士のクリペニスに勝るものは見当たらない。

「私は魔物以上のペニスを生やされたのか……ううっ……ああ……!!」

ゲランシユは蛇舌の先端で、剥き出しの頂上に触れてきた。

ぬめりと肉の弾力を帯びた舌先は、ツルツル亀頭の表面をモッパがけする。まるで輪郭を覚えようとしているかのように、何度も何度もなぞってくる。

張り出したカリのてっぺんとその裏側は特にしつこく舐め回す。男性器と違って皮の繋ぎ目がない——皮は亀頭冠の裏と竿の境目に食い込んで——ので、周囲をグルリと踏破された。

鈴口に舌をねじこみ、浅い部分を出入りする。クリトリスにはない窪みにも神経が通っているのか、ぬめる舌で擦られるとヒリつく快感がこびりついて離れない。

「ぐあああ……熱い……乳首の時よりも……んあああっ!」

舌に舐められていると、鉄棒でも当てられているみたいに亀頭部が熱くなる。特にカリ首をさされている時が甚だしく、まるで燃えている風だった。

襲いかかってくるのは熱感だけでなく、腰全体が痺れる快感もある。目の前で火花が散り、気を抜くとふっと意識が遠くなった。

「はああ、わたしに舐められるだけで亀頭をいやらしくビクビクさせて……気持ちいいんですね……やっぱり騎士様だって人間……こうされると淫らに震えてしまうんですよ……男の象徴を生やされて、魔物に責められても、気持ちよくなるのは仕方ありません……だって、そういう風にてきているのですもの」

「だから我慢してもムダムダ。そんで、アタシは竿をもらいまーす。あくんと」
大口を開けたペラッハが、肉幹の真横にかぶりつく。

植物系魔物の口内は、ゲランシユよりもひんやりしており、まるで冷たい水に浸っているようだった。唾液も卵白みたいに粘っこい。

「ブジュブジュ、ジュルルル、んはあ、すごく熱いよコレ、えろえろえろえろ、んふう、しかも硬くって、オマ○コに入れた時のことを考えると、胸がトキめいちゃうネ」
強く吸い上げ、その快感で振幅する肉幹の裏側を舌でレロレロ舐める。

竿をしゃぶられる快感は肉棒の芯に染み込んでくるタイプで、もっと長い時間このままでいたいと思わせる中毒性を孕んだ危うい快美だった。

「くっああ……この刺激は……はうあ……んああああっ」

M字開脚をさせられたまま、尻タブを飛び上がりさせる女騎士。ペラッハの舌が口中で枯れ葉に変化し、そのザラつきで擦ってきた。ドロツとした粘液が間を取り持っているの痛みと紙一重の快感がペニスを貫く。

「オチンポ、根本からビクンビクン震えていますねえ。啞えていると飛びだしていきそう。すぐくやんちゃんオチンポで、お世話するのが大変ですわあ」

唾液でぬるつく先割れ舌で鈴口をほじりながら、格蘭シユは上目遣いでゼメリアを見る。快感に流されまいと歯を食いしばるが、快感のせいでガチガチと歯の根を鳴らしてしまふ女騎士に向かって切り出してきた。

「騎士様あ、射精したいでしょ？ おっぱいで射乳した時みたいにビューッって思い切り出したいですよねえ？ わたし、騎士様の精液を飲んでみたいんですよお」

甘えるように、媚びるように声を粘らせている。瞳も相応の潤みを見せ、さながら餌をねだる飼犬だった。

（私の状況を見透かして、つけ入ってくる気か……っ）

射精しそうだなどとは一言も言っていないのに、格蘭シユは女騎士の体内で渦巻く射精欲求を看破していた。

腰の奥から湧いてくる衝動。マグマのように熱く、重く、そして膨らんでいく感覚がク

リペニスの根本に居座っている。

しゃぶられるほど強く狂おしく育ており、解放したい衝動を抑えるだけでも相当の努力が必要だった。

(あああ……出したい……出してみたい……射精……してみたい……！)

射乳した時と同じ現象がクリペニスで起こっている。同じだと意識するほど、射乳を体感した乳首はズキンズキンと鈍く疼き、射乳と同じ快感を味わってみたいというドス黒い欲望が大きくなっていく。

「射精しなかったら、射精したいって言えばいいんだヨ。こおんなにバッキバキにしといて、自分は射精したくないなんて言っても説得力ないじゃん」

ペラッハは人差し指を陰部に伸ばす。

淫裂は細指一本をギリギリ通す幅に開いており、愛液がトロトロ漏れていた。地面に落ちて水たまりを作り、太股や会陰、尻に伝って恥ずかしい水濡れを広げている。

「ひいあああつ！ あああ……やめろ………私に触れるな……んあああつ」

指一本が軽く触れ、下から上へとなぞっていただけなのに、グツと背筋が反れてしまい、抗議の声も弱々しい抑揚で弾んでいた。

「オマ○コの割れ目を一掬いしただけで、裏声出して飛び上がったちゃうなんて感じスギー。ここまでとろつとろにトロケてるのに、まだ頑張るワケ？」

たった一回掬っただけでベトベトになった人差し指を突きつける。

「くう……私は屈しない……快感などに流されて堪えるものか……ぐっうウウ……」
 手の中の剣を握り締め、墮落を勧める牝魔物たちを睨む。

これは戦いなのだ。牝モンスターに迎合して墮落すれば、自分の人生はおしまいだし、引退した父親たち、先祖が築き上げてきた地位も身分も水泡に帰してしまふ。王より貸与された国の宝である大切な宝剣もどうなってしまうかは分からない。

「フフ、強情ですわね。流石、あれほどの精気……魂の力をお持ちの騎士様です……でも、今からすることには耐えられますか？ ……射精したくなったら、いつでもおっしゃってくださいね」

格蘭シユは自信たっぷりに微笑みながら、艶々した肉厚唇を大きく開いた。

前半身を露出させ、屈辱のM字開脚で縛られている女騎士。

絶対に射精したくなる、と暗に宣言した牝モンスターは、その蛇舌でクリペニスの肉幹を簞巻きにした。巻き付く舌は肉竿を締め上げ、かと思えば力を緩める。手の平がグーパーを繰り返すようなりズムで締め付け度合いを変えているのだ。

「くっ……うう……んああッ……はあ……あ、そ、それは……！」

締め付けられては緩められる快感に、ゼメリアの呼吸は乱れていく。そこに、ペラッハの追撃がかかる。

「ジャジャン！ またこれでチュウチュウしてやるからね！」

蔓の先端に射乳責めをした時の花を咲かせ、意地の悪い笑みを浮かべている。

無論、ゼメリアは覚えている。達すると母乳を噴き出す身体にされた際、強烈なバキューム快感で責め立ててきた魔の花なのだから。

「やめろ……そんなものが吸いついたらまた——アンアアッ……！」

花は亀頭に食いついた。花の内側からは粘い汁が分泌され、クリペニスの牡肉塊は瞬間にドロドロにされる。凹凸だらけの内側は早速蠢き、啜え込んだ先端をジュプリジュプリと研磨してきた。

「くはあ……んっ……あああ、私の……ンあ……ぺ、ペニスが熱くなって……」

熱に浮かされたような顔のゼメリアが、あえぐ合間にうわごとめいた呟きを漏らす。

亀頭も竿も芯まで熱くなっている。内部がヒリつくような快感の坩堝と化し、竿と亀頭を別々の快感で責められるクリペニスは暴れるように跳ねていた。

「もっと締めてあげますわあ。オチンポは硬く膨らむ一方なのに、逆に押さえつけられるのはもどかしいですよねえ。射乳した時の清々しい快感が欲しいですよね？」

ゲランシュが親しげに尋ねてくる。同意の言葉を引き出して、抵抗心を削ぎうとうと言うのだろう。

（その手に乗るか……だが……ああ……思い切り出せたらどんなに気持ちいいだろう）

迎合は破滅と分かっていても、射精の誘いはとても無視できない。気が付くと、腰の奥から膨れ上がっている衝動を解き放つことを考えている。

母乳が噴出するように、クリペニスから勢いよく精液が出ている光景が頭の中で何度も再生されていた。

射乳の快感は、心身が蕩けてしまいそうな開放感を伴っていた。射精も放出する快感なのだから、同じ位に気持ちがいいのだろうか？

「あれえ、腰が動いてるねえ。アタシのお花の中に射精したいのお？」

指摘されてハツとする。いつの間にか、バキュームされるリズムに合わせてキュツと括れた腰を前後に振ってしまっていた。

「違うっ、腰が勝手に動いただけだ……私は射精など望んでいない……！」

「勝手に動いたということはあ、もっと気持ちよくなりたいたいと思ってるって証拠ですよ。ヤセ我慢などしないで、射精したいと言ってください。そうしたら、いくらでも出させてあげますから」

聞き分けのない子供をあやすように、ゲランシユが語りかけてくる。巻き付けた舌をぐいぐい竿に食い込ませ、忍耐力をじわじわと削ぎながら。

（くうう……油断したら淫らな妄想に我を忘れて……私は何をしている……流されては駄目だ流されては駄目だ……耐えるんだ……！）

「まだ素直になれませんかあ。それでは」

奥歯を噛み直すゼメリアを見つめていた格蘭シユが、竿に巻いていた舌を一気に解いた。亀頭部に吸いついていた花も離れる。

解放された逸物は、勢いよくピーンとそそり立つ。

（あああ……舌も花も離れたのに……この感じは……あつ）

魔の肉具が離れたというのに、ペニスを責められていた感覚が一瞬で懐かしくなる。責められていない方が都合がよいのに、責められていないのが物足りない。

「あらあら、切なそうにビクビクして……今、気持ちよくしてあげますからね」

ゼメリアにはなくペニスに向かってそう言うと、格蘭シユは亀頭を咥え込む。花の汁がこびりつく肉塊を、窄めた頬の裏側で包み込み、美味しそうに舌で擦りあげる。

上目遣いでこちらを見る目は酷く親しげで、思わず髪を撫でたくなる気安さだった。

「アタシはこっちなね」

ペラッハは肉竿に蔓を巻く。格蘭シユの時とは異なり。竿の五分の一ほどを締め上げるに止めている。

と、巻き付く蔓の内側から粘い汁が染み出てきた。花の内側から分泌されていた粘液と同種のもので、巻き付く蔓の圧迫感を奇妙な快感に変換させる。

ヌチュツ、ニュルルチュ、ニユプツ、ジユプツ。

もどんどん熱を持ち、胸の奥からは煮え滾る衝動の塊が移動してきている。腰奥からも、マグマみたいに熱くて粘り感触がじわりじわりと押し寄せてきている。

(ああ、またきた……こんなの、まともな生活を送っていたら味わえなかつた……)

騎士の誇りも人間の矜持も投げ捨てた今、ゼメリアは自分から快楽を甘受するだけの肉人形に成り果ててしまっていた。

自分で自分の胸を揉み、蛇舌の研磨に合わせて腰を振る。

乳首の先が燃えるように熱い。もう、先走りの乳汁は先端まで来ているのかもしれない。クリペニスの先端から先走り汁の粘糸が垂れる様子を見つめながらゼメリアは思った。

「ソフフ、魔物に責められているのに気持ちよさそうにして……このまま射精したいですか？」

「ああ……搾り取って欲しい……頼む……」

お前たちに屈服させられやしないと豪語していた騎士が、しおらしくねだる。

「うふふ、なら、牡も交えましょう。そうすれば、もっと気持ちよくなつてたあくさん射精できますよ」

「何……?」

てつきり、このまま死ぬまで牝魔物に嬲られるのだとばかり思っていただけに、ゼメリアは耳を疑った。

「そのミノタウロス、騎士様のオマ○コを犯しなさい」

ゼメリアに向けるのとは全く違う、女帝の声音で牡魔物に命令する。その魔物はかぶりつきで女騎士の痴態を凝視していた一体だった。

ゲランシュのだめ押しの宣言が、呆然としたゼメリアを正気に戻す。

「な……誰が貴様などに……来るな……ひいッ」

鼻息荒いミノタウロスは、半牛半人の魔物。

体長は二メートルを超えている。黒い牛毛混じりの胸板は筋肉質でドス黒い。人間の足と言うよりは牛寄りの足を備えた下半身も、上半身同様に筋肉質で黒みの濃い茶色をしている。

そして、股間の逸物。

巨根と賞賛されたゼメリアのクリペニスに勝るとも劣らない長さ太さを誇っているが、その体色は毒々しい。傘の開いた剥き出しの亀頭は黒ずんだ紫色で、竿を覆う皮は褐色混じりの闇色をしている。表面のそこかしこには、ミミズがのたくっているような紫色の血管が浮いており、力強く脈動している。

ぶら下がる陰囊も、女の手の平では掴みきれないサイズだった。輪郭浮き出る辜丸は鶏卵ほどもあり、相当な量の子種がため込まれていることが窺える。

ミノタウロスはゼメリアの足の間割り込んで寝そべると、腰をがっしり握った。本気

で握られたら細腰が砕かれてしまいそうな膂力と熱い体温が染み込んでくる。

「ぶるおおおおおオオオオ！」

人語を喋れない魔物は吠える。目の前で屈強で美しい女騎士が犯されているのに、見て興奮していることしかできなかった鬱憤を存分に晴らしてやると言っているような絶叫だった。

「む、無理だ……入るわけがない……私は人間で、処女だぞ……やめさせて……！」
ミノタウロスなど剣の一振りでも易々と葬ってきた女騎士が、か弱い少女のようにガタガタ震えている。凜声は弱々しい抑揚を紡ぎ、目尻には涙さえ浮かんでいる。

「大丈夫大丈夫。女の身体はすぐいやらしくできておりますから、こんなの一本や二本。初めてだと、ちよつと痛いかも知れませんが、それもケアいたしますわあ」

ゼメリアに背後から抱きついていているグランシュが気楽に言ってくる。

クリペニスに巻き付ける蛇舌は萎えない逸物を扱き続け、乳房の先に吸いついているペラッハの花も相変わらずチュウチュウ乳首を吸っている。

「ンああ……ケア、だと……ああ、どう言うこと、だ……ああ……ああッ」

「射乳と射精を同時に行っている時に膜を破れば、快感で痛みなど感じないはずですよ」

そう言うのと、グランシュはクリペニスを蛇舌で猛然と扱き始めた。ペラッハの花の乳首責めも加速する。

上半身と下半身の性感帯を同時に責められ、ゼメリアの身体は熱くなっていく。乳首とクリペニスの快感も増し、再び白いマグマがこみ上げてくる。

「んあああ、出るっ、またイクッ、ああああ、はああああ、ンアアアアアア！」

快感に馴れてきた女騎士は、牝魔物の手であっさりザーメンと母乳を撒き散らす。精液は雨のように周囲に降り、母乳は乳首に吸いついていた花を吹き飛ばし、精液の上に覆い被さっている。

ゼメリアは背中を仰け反らせ、顎をかくく上げ下げし、陰部と胸元を粘つくく痙攣させていた。精液を噴き出すクリペニスも母乳を放つ乳房も、放つ際は痙攣の振幅で振り子のように跳ね上がるので、白い体液は女騎士の身体と真紅の鎧を穢している。

ミノタウロスに腰を掴まれ、淫裂に勃起魔物ペニスの穂先を軽くめり込まされる状態で、ゼメリアは絶頂し、

「今よ、やりなさい」

ゲランシュが厳然と命じた。

ミノタウロスはギラつく瞳に嗜虐の色をたたえながら、握っていた細腰を自分の方へグイッと引く。大男さえも軽く吹き飛ばす腕力に、絶頂したての女騎士が抗えるはずもない。引つ張られたとゼメリアが気づいた次の瞬間には、

ブツリッツツッ！

「ひいあああツツツ………!!! い、痛いっ、あああ、いやあああっ！」

痛苦の絶叫を上げる女騎士。人生で一度しか味わえない痛みは鋭く、身体が一刀両断されたみたいな激しい痛感だった。厳しい修行に明け暮れていた女騎士も、防御のしようがない痛みに喉を哽らして泣き叫ぶ。

ミノタウロスの逸物は、カリ高の穂先で処女膣を掘削しつつ、自分の形に押し広げながら進んでくる。

誰の進入も受けたことのない膣肉は、異形のペニスを力尽くで啜えさせられ、気色の悪い脈動を擦りつけられていた。

「射精と射乳もしているのですもの。痛いだけではありませんでしょう？ 尖った乳首も、張りつめたクリペニスも気持ちよさそうにビクビク震えてますわぁ」

鼓膜にこびりつくような媚声を耳介に浴びせるゲランシュ。

「あああ、でも、でもおっ、魔物が私の初めてをつ、いい、かはっ、い、さ、裂けちゃうッ、大きすぎてオマ○コ裂けちゃうっっ！」

快感で魂を溶かされた女騎士は、普段の気丈な口調まで崩れていた。転んで膝をすりむいて泣きじゃくる幼女のように、みっともなくわめいている。

射精と射乳の悦楽はあるが、魔物のペニスに膣を踏破されていく汚辱と苦しみは拭えない。

今にも膣が破かれそんな危機感が愛液の分泌を阻害して、挿入はぎこちなくなる一方だった。

しかし、ミノタウロスは抵抗感溢れる膣と力尽くで合体していく。

膣が迎合しなくとも人間離れした膣力がある。ガツシリ掴んだ細腰を無理矢理下降させ、肉壁を容赦なくめくりながら亀頭の先と子宮口をべったりとくつつける。

結合部からは破瓜の血が流れ、毒々しい魔物ペニスを伝ってその股間に落ちていく。

ミノタウロスの逸物は、最奥の肉壁と接している。しかし、ペニスの根本まで入りきったわけではなく、まだ数センチほど根本が露出していた。

「仕方ないですねえ。なら、気が紛れるようにもつと射精と射乳をしましょう」

肩をすくめた格蘭シユは、蛇舌で簀巻きにしたクリペニスを扱きながら、わきの下から手を通し、乳房に手の平をつけて乳首を掴む。

「遠慮なく出して気持ちよくなってください。またビュッてすれば、愛液がたつぷり出てきて挿入もラクになりますし、快感で痛みも和らぎます」

格蘭シユはあくまで牡魔物との合体を強いるらしい。手の平を軽く弾ませて乳房を揺さぶりながら、摘んだ乳首を指の腹で擦ってくる。

蛇舌の扱きようには遠慮がない。張りつめている根本からカリの下までの区間を力強く扱いている。

馴染んできた爆発の予兆が再び胸と腰の奥に生まれ、じりじりと迫ってきていた。

「ひっ、ま、またくるっ、んあああ、また気持ちいいのがくるう、も、もういいっ、こんなのもういいからあつ！」

おぞましいミノタウロスと合体するためだけに快楽を与えられる。そんなことは嫌なのに、ゲランシユはやめてくれない。声の限りに懇願しても、牝モンスターは翻意する素振りすら微塵も見せなかった。

「もう少しですから。オマ○コも気持ちよくなりながら射乳と射精をすると、死んじやいそうな位に気持ちいいんですよ」

胸が燃えているように熱くなり、擦られる乳首に解放欲求を孕んだ灼熱感が宿る。クリペニスも同様で、最高潮に膨張した亀頭は緊張感漂う振幅を繰り返していた。

本人の意思とは反対に、魔物に飼い慣らされた乳頭とクリペニスは爆発寸前だった。共鳴した膣も再び愛液を分泌させている。ミノタウロスと肉壁の間に愛液が潜り込み、両者の摩擦感を軽減させていた。

「ぐおおおおオオオオオ！」

獐猛な吠え声を上げたミノタウロスは、その状態でさらに細腰を引き寄せた。入りきらなかった竿部が、膣内に埋没する。

ズンツツツツツ！

「んああああああ！」

穂先が子宮口を突破して、子宮内部の奥を叩く。

まるで膣の入り口から頭のとっぺんまでを、極太ペニスで串刺しにされたような衝撃が駆ける。

背中を弓にして顎を跳ねたゼメリアは、顔を上向かせたままカッと目を見開く。半開きの口を魚のようにパクパクさせながら、裏返った叫び声を上げていた。

「あらら……子宮まで貫いちゃったんですねえ。でも、こんなこともあるのかと、クリペニスの魔法をかける時に子宮を少し丈夫にしておきました。壊れることはないでしょう。じきにペニスと馴染みますから安心してください」

「あああ……いいひ、お、奥で脈打ってる……ビクビク震えて、あああ……これ……これ……まさかあ……」

子宮の奥と触れ合っている亀頭の振幅。同じことを繰り返して牡の快楽を貪っていたゼメリアにはどういう意味なのかがよく分かった。

ゲランシュがだめ押ししの解説を始める。

「性感も上げておきましたから、ミノタウロスの汚らしいチンポの様子に分かるのですね？ 子宮の奥にびったりくつついたミノタウロスのきつたない亀頭から、汚らわしい精液が出そうなの、感じてしまわれているのですね？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>